

## たどりつくまでの「道のり」にこそ

神石小学校長 田丸 栄

先月末の学校運営協議会の時に、一人の委員さんから「すぐに『答え』を書こうとしてはいないか。」「意味がわかっていなくても、間違いを消し『答え』を書いている。」「あまり考えもせず、少し考えてわからないと、ドリルなどの『答え』を写す児童がいる。」「『考え』『答え』を導き出すまでの『道のり』にこそ学びの本質があるのに……」というご意見をいただきました。さらに、先日の福元哲郎様の講演でも、幾度となく自分を襲った『悲劇（宿題）』を、一つ一つ自分への試練と捉え、それをプラス思考で乗り越えられたお話を聞くことができました。

本来ならば、子ども達が『自分で』考え、課題を解決する『道のり』の楽しさを感じるとともに、『答え』に辿り着くまでの『道のり』こそが大事であると理解し、挑戦していくことが大事なのでしょうが、すぐには、そのような考えにはなりません。学校では、問題を解いている途中での発見（新たな学び）にこそ『学びの楽しさ』を感じるようにしていくことが大事ですし、新たな学び・発見をした子どもに対してその学びこそ意義のあるものだという、価値づけをする言葉を投げかけなければなりません。

私は、六月の全校朝会の中で、「アジサイの花はどこ？」「花の色はどうして変わるの？」というアジサイにかかわる問いを二つ。「カタツムリの出っ張っているところは、つの？やり？めだま？」「カタツムリの目玉はどこにあるの？」「ナイフやはさみのようなとがったところを歩くことができるの？」「歩けるとした

ら、どのようにして歩いているの？」という問いを投げかけています。実際に、確かめるという「道のり」を大事にしてくれる子どもが何人いるでしょうか。今から楽しみにしています。

